

## 1 条件設定に当たって

「話し合い・聞き合う」とは、互いの思いや考えの根拠を明確にして意見交流する子どもの状態を指す。「再構築していく」とは話し合い・聞き合う活動から互いの根拠を理解することで、自分の中の思いや考えがさらに補足・強化・修正・洗練され、知識が関連づいて新しい知識を生み出そうとする子どもの状態を指す。この知識を再構築していく状態が繰り返されることで、子どもに思考力・判断力・表現力が育まれるととらえている。

ところが、子どもはみんなに話したい、自分の意見を聞いてほしいという意識が強く、友だちの話に耳を傾けて聞く姿がまだまだ十分ではないと考えている。この聞き合う姿が十分でないのは、聞きたいという学習意欲の不足が原因の一つであるととらえている。また、子どもがこれまでに培った学習経験や生活体験に違いがあり、身につけている語彙や言語の質に差があり、正確に聞けず十分な話し合い・聞き合う活動にいたらないという場合もある。

そこで、このような現実を打破し、思考力・判断力・表現力をはぐくむ話す・聞く活動の成立のために、以下の三条件を設定し、取り組むことにした。

- ・条件A 課題解決への意欲をもつ
- ・条件B 比較・分類・関連づけの視点をもつ
- ・条件C 言語を視覚的に支える表現の場がある

## 2 条件について

### ・条件A 課題解決への意欲をもつ

聞きたいという学習意欲を高めるために、まずは一人一人に学習課題を明確につかませることが大切である。学習課題を一人一人がつかむことで、解決のための意欲の第一歩となる。そして、共通体験を通して、互いの学習経験や生活体験の共通点や相違点、矛盾点に気付くことが大切である。そのための場の設定が必要である。その場を足がかりにして、全体で解決していきたくなる、子どもにとって適切でありしかも抵抗感のある課題を生みだしていくのである。これによって課題解決への意欲が高まり、学習の原動力となると考える。

### ・条件B 比較・分類・関連づけの視点をもつ

一人一人が課題をつかみ、話し合い・聞き合う活動が活発になっても、解決の糸口が見つからない場合がある。これでは思考力・判断力・表現力をはぐくむ話す・聞く活動にならない。そこで、教師の深い教材研究による明確な支援（発問や思考を整理する板書等）と、そのための手だてが大切である。それと同時に、条件Bの子ども自身が話し合い・聞き合うための視点を身につけておく必要がある。その視点とは、比較・分類・関連づけの視点である。今何と何を比較しているのか、その比較から何が分かるのか、何をもとにして分類しているのか、何と何をどのような根拠で関連づけているのか等が分かる話し合い・聞き合う活動を通して、互いの知識の再構築が促されると考える。

### ・条件C 言語を視覚的に支える表現の場がある

言語だけを使って伝えようとすると言葉足らずになり、うまく表現できない場合がある。これは下の学年ほどその傾向が高くなっていく。そこで、具体物や絵図、写真等を利用し、言語を視覚的に支える表現の場の設定が大切である。このような場を設定することで、互いの思いや考えの根拠が分かりやすくなり、より活性化した話し合い・聞きあう活動になると考えている。

### 3 おもな実践

#### (1) 国語の実践を通して

##### ・条件A 課題解決への意欲をもつ

単元「はなのみち」は、1年生が小学校で初めて学ぶ物語文である。単元の導入の際に、「この袋の中身は何だったのかみんな気付いたかな？」と問うと、みんな種だと答えた。「くまさんも種と気付いたかな？」と問うと、「くまさんも気付いたよ。」と全員が答えた。では、「くまさんがこの中身が種だと気付いたのはどこだろうね。」と問うと、3の場面と4の場面に意見が分かれた。これらの考えの違いから、課題をくまさんが種と気付いたのは何の場面だろう。>とし、それをみんなで考えていくことにした。

1の場面、2の場面はくまさんは種だと気づいていないと共通理解できた。いよいよ3の場面である。3の場面の挿絵を見て、「穴の開いたふくろをのぞいているくまさんの足下に、種が落ちているよ。」(石を描いているようにも見える)と主張する子がいた。「ここに落ちているのが種だから、くまさんはすぐに気付いたはずだ。だから3の場面で気付いた。」と説明していた。この意見に賛同する子もいた。しかし、3の場面と主張する子の根拠は、挿絵からの想像だけであった。4の場面と答えた子は、「4の場面の文の中に“はなのいっぽんみちができました。”と書いてあるので、ここでくまさんは絶対に気付いた。」「冬にこぼした種が春になって花の一本道になったから4の場面で気付いた。」などの意見が出され、子どもの考えはほとんどの子が4の場面になっていった。この学習は、子どもの中の相違点から課題をつかみ話し合った初めての学習であり、子どもは自分の主張を聞いてもらおうと一生懸命であった。これまでにない意見の盛り上がりがあった。その反面、3の場面であると主張する子の中には挿絵に描いてあることを主張するばかりで、相手の意見を聞くことができない子もいた。相手の意見を聞き、納得できるときには賛成することの大切さについて考えることができる学習となった。

単元「いろいろなくちばし」は、1年生で学ぶ初めての説明文である。子どもは、これまでの学習経験や生活体験の中で、鳥について知っていること(名前や食べ物、すみかなど)がいくつもある。特に興味のある子は図鑑などでよく調べており、教師が知らない鳥の性質までもよく知っている。しかし、それはほんの一部で、鳥のくちばしの形が食べ物やすみかに関連していることを知っている子は、少なかった。

そこで、子どもの知識を掘り起こすための共通体験として、まずペアで知っている鳥の名前を出し合う活動を行った。これは、1分間でいくつの鳥の名前を出し合えるかペアで取り組む活動である(写真1)。多いペアでは、二人で三十羽近くの鳥の名前を出し合うことができた。単元の導入時に子ども一人一人のもっている知識を掘り起こす活動は、これからの学習意欲を高めていく点で有効であった。そして、この共通体験を通して鳥にはいろいろな種類があることや、自分が全く知らなかった鳥がいることに気付くことができた。この活動の後、学級全体で思い浮かんだ鳥の名前を発表し、ある程度出たところで、「みんなが教えてくれた鳥のくちばして、どんな形か知っているかな。」と問いかけた。「とがっているよ。」「まがっているよ。」とくちばしの形の話に進んでいった。教科書にいろいろなくちばしの説明文が書いてあることを知っている子は、「教科書に出てるよ。」「ぼく読んだことあるよ。」「ほらこの写真だよ。」と教科書を開き始めた。そこで、今回は教科書を見ることを止めずに、「教科書に出ているね。みんな教科書を開いてごらん。何ページかな。」と聞き、はじめの写真が出ているページを見つけさせて、<どうしてとりのくちばしはこんなに形がちがうのだろう。>と改めて問いかけた。このように、子どもの興味関心や思考を切らすことなく、課題につないでいくことができた。それまであまり鳥のくちばしに関心がなかった子も、興味をもって取り組む様子が見られた。このように、はじめのペアで知っている鳥の名前を出し合う活動から課題をつかむまで、とても意欲的に取り組むことができた。この課題をつかむ学習は、この後の学習の原動力となった。



写真1 ペアによる鳥の名前出し合う活動

T : 鳥のくちばしはどんな形をしているか知っているかな？カワセミとクマタカの写真を比べていえるかな？

【二種類を比較する学習】

A児：カワセミはちよつととんがっているけど、クマタカはちよつとまがっているよ。

B児：カワセミはちよつととんがっていて、クマタカはこんなかんじだよ。  
(手で表現・動作化、それでも伝わりきらないと考えると図で説明)

C児：カワセミはキツツキとにしています。クマタカはオウムとにしています。

D児：カワセミはよこにとんがっているし、クマタカは下にとんがっている。

E児：カワセミはこんなふうに乗っすぐのびているけど、クマタカは下にまがっている。  
(伝わるように動作化して説明)

F児：カワセミは長くまっすぐのびているけど、クマタカはE児と同じで下にまがっている。(伝わるように動作化して説明、前発言者と比較している)

G児：カワセミは先がすどくとがっている。クマタカは太くてまがっている。

T : 他の写真の鳥もこれらと比べたら、こうなっているといえるかな？

【先の二種類をもとにして残りの3種類を比較する学習】

H児：スズメはくちばしが短い。(何と比べているかはっきりしなかった)

I児：ベラベラサギはうすっぺらいくちばしをしている。

T : 何と比べたらうすっぺらいの？(問い返し)

I児：クマタカと比べたらうすっぺらい。

J児：ダイシャクシギは細長い。

T : 何と比べたの？(問い返し)

J児：カワセミと比べた。

K児：カワセミとダイシャクシギを比べたら、ダイシャクシギは下にだらんとしている。(写真を示しながら説明)

L児：ダイシャクシギは細くて下にまがっているけれど、クマタカは太くてまがっている。

T : 同じまがっているけれど、太さが違うんだね。・・・(他数名続く)

資料1 授業記録(比較を取り入れた授業)



写真2 図による説明

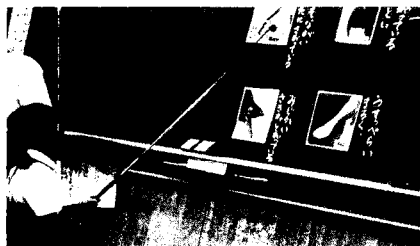


写真3 写真を利用した説明



写真4 動作化を加えた説明

・条件B 比較・分類・関連づけの視点をもつ

今回は、比較の視点を意識して実践を行った。先に述べたように、<どうしてとりのくちばしはこんなに形がちがうのだろう。>という課題から教科書の写真を見ることにした。教材文のはじめと終わりには、五枚ずつの写真が出てくる。はじめの写真には、「カワセミ」「クマタカ」「ダイシャクシギ」「ベニヘラサギ」「スズメ」の五羽のくちばしがアップで紹介されている。終わりの写真には、えさを啄んでいたり、水辺で生活をしていたりといったえさや生活環境について分かる写真が載せてある。

はじめの五枚の写真を同時に比べるのは、1年生には難しい。そこで、まず「カワセミ」「クマタカ」の二羽のくちばしの写真の比較からはじめていった。すると、子どもから二つのくちばしの特徴が次々を発表されていった(資料1)。

子どもの最初の発言は、A児であった。二つを比較して、「カワセミはちよつととんがっているけど、クマタカはちよつとまがっている。」と答えた。この発言を受けて、自分の考えと比較する意見が出てきた。出されたキーワードは、カワセミは「とんがっている」「長くてまっすぐのびている」「先がすどくとがっている」など、クマタカは「下にまがっている」「太くてまがっている」などであった。二つのくちばしを比較すること、前発言者の意見と比較することで、これらのくちばしの特徴が徐々にはっきりしていった。これによって、これまで子どもがもっていたくちばしに対するイメージが、知識として徐々に再構築されていった。これらのカワセミ、クマタカの発言をもとにして、他の三つのくちばしの写真を比べていった。資料1にあるように、教師が何と何を比較しているのかを問い返すことで意識化され、1年生でも自分たちで数枚の写真を比較することができたのである。

・条件C 言語を視覚的に支える表現の場がある

条件Bでの発言を支えたものは、言語だけではない。言語で通じていないと感じるときには、図で表現したり(写真2)、写真を示しながら説明したり(写真3)、動作化したり(写真4)して発表することが大切である。これは、4月当初より相手に伝えたいという子どもの思いを実現するために、図で描いて説明したり、写真を指し示しながら説明したり、動作を交えて説明したりする子をほめて、みんなのモデルとして取り上げてきたからである。これは、国語のみならず、算数でも生活科でも取り組んできている。このような日頃の話し合い・聞き合う活動が、子どもの言語を支える発言につながっていったのである。

(2) 算数の実践を通して

・条件B 比較・分類・関連づけの視点をもつ

単元「ひき算」では、これまでに学習してきたたし算との違いを明らかにしていく必要がある。それは、たし算との違いを比較することで、既習のたし算がより明確になるとともに、新

しく学ぶひき算の概念をより鮮明に印象づけるためである。そのために、たし算の学習をまとめた掲示を用意しておき、ひき算との違いを問うことから始めた。さらに、ひき算の学習には、「のこりはなんこ（求残）」「ひくとなんこ（求補）」「ちがいはなんこ（求差）」の三種類の概念がある。それぞれの概念を一つ学んだら掲示として残していき、授業の前に必ず前時を振り返ってから、本時の学習に入るという手だてをとった（写真5）。求残の学習の後、それを既習として比較しながら、求補の学習に取り組んだ。

「ひいたらなくなってしまうひき算と、ひくだけでなくなるひき算があるんだね。」「どちらも $5-3=2$ になるんだ。」と、二つの比較から違いを知り、その二つが同じ式になることを関連づける学習になったと考えられる。

#### ・条件C 言語を視覚的に支える表現の場がある

算数の学習では、おはじきやブロック、絵図などを繰り返し利用している。そのため、黒板で掲示用のおはじきやブロックを操作して説明する子どもが増えてきている。「ちがいはなんこ（求差）」の学習では、それまでのひき算の学習と違い、二量を一対一対応させて考えなければならない。この一対一対応で考えることが、子どもには難しい。これまでのひき算とは全く違う考え方である。問題を読んだだけでは、二種類の花の関係がよく分からないという子もいた。そこで、黒板に二種類の花を意図的に固めて貼り、「どちらの花がどれだけおおい。」というの、どのように考えたらいいのか問いかけた。「花が固まっていると数が分かりづらいので、広げて並べる」「赤い花と黄色い花の数を比べているのだから一つずつを線で結ぶ」、「赤い花と黄色い花を赤い線で囲んで、男子女子で並ぶときのようにペアのチームにして考え、余った花で比べる」（写真6）などの意見が述べられ、徐々に問題の構造が明らかになっていった。しかし、「二つの花の数を比べるときにはなに算になるのか。」と問うと、ひき算と答える子がほとんどであったが、まだはっきりしない子が何人かいた。そこで、今までのひき算との違いを一人一人がはっきりさせるために、実際に全員がブロックで操作し、これによってひき算であることが全員に伝わった。「なるほど、今日のひき算は二つの数を比べているんだ。二つの数を比べて余っているところが答えなんだ。」と納得できたのである。ノートには、自分の言葉でふりかえりを書くことができた（写真7）。

言語は思考の要であるが、それを補う具体物や絵図、写真等を利用し、目に見える形で表現したり、実際に一人一人が操作して体験できるようにしたりすることが大切である。これによって言語での意味が明確になり、互いの話し合い・聞き合う活動が深まり、思いや考えの根拠を明らかにすることにつながった。一人一人の考えの再構築ができたと考える。

#### 4 今後に向けて

このように三条件から取り組んできたが、条件Aでは、子どもが課題をつかみ課題解決への意欲をもつことが1年生にとって何より大切である。そのために、驚きがあり友達との違いが生まれる教材開発や、教材提示の工夫に今後さらに取り組んでいく必要がある。条件Bでは、1年の一学期ということもあり、比較・分類・関連づけのうちの分類については触れることができなかった。今後検討していきたい。条件Cでは、言語を視覚的に支える表現の場があることは、自分の思いや考えを再構築していく上でとても重要な条件であった。さらにその手立てについて明らかにしていく必要がある。

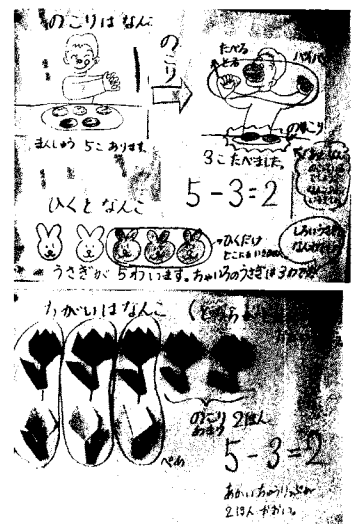


写真5 既習を振り返るための掲示



写真6 赤い花と黄色い花の数の比較の様子

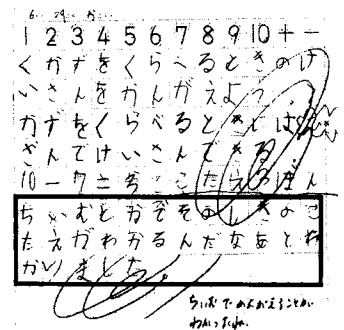


写真7 学習後のノート